

このページは、小・中学生に向けて梅光学院大学子ども学部子ども未来学科(地域共生ゼミ)の学生が作っています。

※イラスト 渡邊志帆さん

しものせき キッズページ



▲アンカー広場のプロペラ(左)といかり(右)

だいにじゅうごとしまる 「第二十五利丸のはなし」



▲アンカー広場に設置された「捕鯨砲」。発射されるもりの飛距離は、40メートル~50メートルもあったそうです！

平成27年3月28日、観音崎町のアンカー広場に、捕鯨船としての役割を終えた「第二十五利丸」のミニユメントが設置されました。第二十五利丸には、どんな歴史があるのでしょうか。

第二十五利丸は、どんな船？

第二十五利丸は1962年に建造され、同年7月に進水した下関生まれの捕鯨船です。当時、同じ型の船の中で最大速力を記録した利丸は、世界で最も速くて美しい捕鯨船と呼ばれていました。捕鯨船は、鯨を捕獲するための船で、



高速で鯨を追いかけられるように大型エンジンをのせています。その他、捕鯨砲や見張台などの特殊な装備があります。

活躍を語り継ぐために

第二十五利丸は、これまでに南洋(南極海)へ40回連続、北太平洋へ26回、鯨を捕りに行くなど、たくさん活躍してきました。2002年9月に最後の航海を終え、共同船舶株式会社から下関市に贈られました。その後、2007年から下関漁港内で展示されていますが、潮風にさらされて古くなった船体がさらに傷んできたため、昨年解体。これまでの活躍を伝えていくために、第二十五利丸で使われていた捕鯨砲やプロペラ、アンカー(いかり)などがミニユメントとして設置されました。

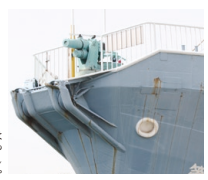


近代式捕鯨 発祥の地・下関



1899年、日本で初めて近代式(ノルウェー式)捕鯨を取り入れた日本遠洋漁業株式会社の出張所が置かれたのが、今の岬之町付近であるとされています。近代式(ノルウェー式)捕鯨は、

捕鯨の先進地・ノルウェーから入ってきたもので、船の先端にある捕鯨砲に火薬をつめ、爆発させてもりを発射します。もりにはロープが付いており、より確実に鯨を捕獲できるようにになりました。船の側面には穴が空いており、鯨の尻尾をくくりつけ、母船まで運んでいました。



くじらと捕鯨の伝統を次世代に



アンカー広場に設置された四つのミニユメントについて紹介します。捕鯨砲は鯨を捕獲するために一番重要な道具で、火薬の力で鯨に向けて平頭鉋を飛ばします。命中率を高めるため、もりの先端が円柱形の特殊な形をしています。プロペラは、船の形や船が進む力の強さを考えて、最適な速さ・力が出せるように作られました。甲板(いかり)と、気象観測のため、第二十五利丸とともに南極海の風を受けてきた風向風速計もあります。触ることもできますので、アンカー広場を訪れ、船乗りの気分をぜひ味わってみてください。

がつこう へんしゅう きしや ひだり
5月号の編集記者(左から)
原田 陽さん 渡邊志帆さん

▲鯨の捕獲の様子。船の左側にいる鯨をめがけて、捕鯨砲からもりを発射します。

▲第二十五利丸は、重心の低い独特な形をしています。